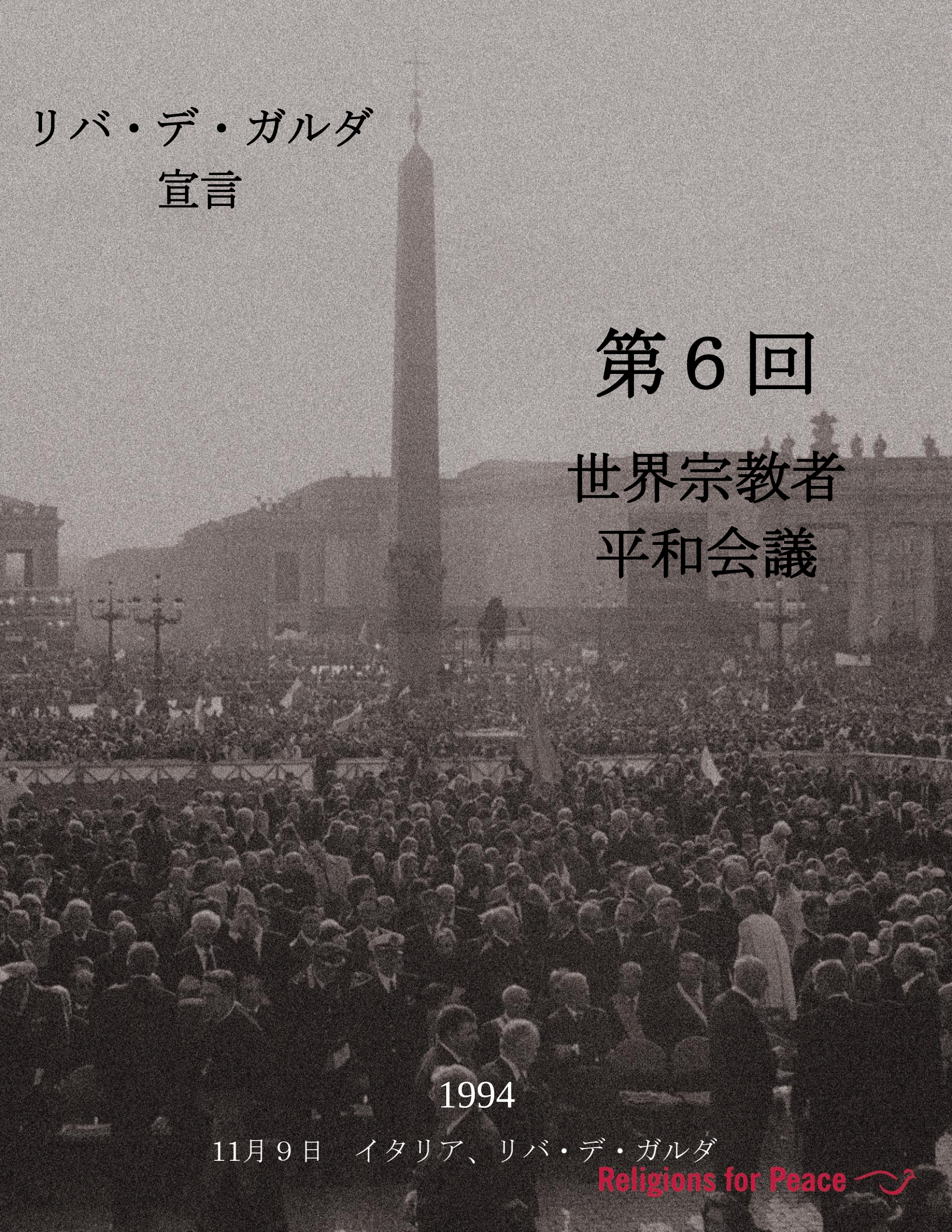




リバ・デ・ガルダ
宣言

第6回
世界宗教者
平和会議

1994

11月9日 イタリア、リバ・デ・ガルダ

Religions for Peace 

1000名を数える世界の諸宗教代表が、「世界の傷を癒す：平和をめざす宗教」をテーマに、イタリアのローマおよびリバ・デ・ガルダで開催された第六回世界宗教者平和会議に参集した。事前にもたれた婦人会議および青年会議は、本会議と一体を成すものであった。ここに集まった我々は、宗教や国を異にし、異なる伝統を享受し、異なる文化に育まれたものであるとはいえ、皆すべて、平和を求め、正義を追求し、環境を護り、子供たちに体现される我々の未来を確保しようという共通の思いに駆られて参集した。我々はまた、ともに傷を癒すという将来的ビジョンの展開を心に期するものである。

世界は、冷戦期から、いまなお定かでない新秩序へと移行しつつある。この移行期にあつて、我々は次々と生ずる出来事や技術に遅れまいと懸命に追い掛けている。イデオロギーが崩壊し、事物の諸関係が一層不分明になるにつれて、分裂崩壊の兆しは至る所に見えている。たしかに、多種多様な民族、言語、宗教、文化、経済体制相互の触れ合いは、一つの新しい世界共同体へと向かう刺激になっている。とはいふものの、貧困、不正、資源獲得不能、抑圧、差別、暴力といったものが、何十億という人々の生活を脅かし続けている。そうしたなかにあつて、永い闘争ののちに、不正義が正義へ、抑圧が自由へ、差別が公正へ、暴力が平和へと転換されてきているところでは、明らかに癒しが認められる。

多くの人々がより大きな経済的、社会的、政治的自由を享受している。とはいえ、甚だしい不公正が今なお存在し、あまつさえ増大しつつある。開発と技術の進歩は多くの希望を約束するが、しかしそれにもまして貧富の間の距離を増大させ、環境を悪化させる。科学の進歩を規整し、その力を最大幸福の達成に向かわしめるための倫理が、今ほど切実に求められている時代は他にない。

核軍縮および武器貿易のより計画的な規制のための措置が取られてきているとはいえ、武器の拡散は、如何ともし難い状況にある。我々の社会にどれほど

軍事化が進んでいるかをみれば、それは、価値観や優先順位が歪められているという証拠である。より恐ろしく強力な武器を製造するために、研究・開発の競争が依然として続けられている。

中東、中米、北アイルランドなどでは、癒しに向かうための手が打たれ、平和の希望が生じている。ナミビアは新たに独立し、カンボジアおよびハイチでは、国民が国の再建に取り掛かりつつあるということは、まことに喜ばしい。これらのところに正義をもたらすためにその命を捧げた人々や、いまなお闘争を続けている他の人々を、我々は深く心に留める。

権利と責任を伴った世界共同体というビジョンが形を取りつつある。我々の社会で最も弱い立場に置かれ、片隅に追いやられている人々、すなわち女性、子供、少数者などの人権は、徐々に認められるようになってきた。にもかかわらず、差別は我々の世界では、それどころか我々の宗教的共同体の中でも、依然として根強く残っている。地球の神聖さ、そして我々と地球の一体性は、多くの場所で実感され、我々を育み支えるこの壊れやすい生態系を、正しく管理していくという我々に課せられた責任を痛感させる。とはいふものの、自然環境は、未曾有の速さで荒廃させられつつある。

この時代の不確実性の中に、大いなる危険と深甚なる苦悩が残存している。我々の地球社会は、あまりにも深刻な精神的危機に見舞われているので、積極的な変革が阻まれている。自己のアイデンティティを追求するあまり、長年にわたって押さえつけられてきた民族間の相違が際立たせられることによって、国際秩序は解体の危険に曝され、誇張された個人主義に脅かされている。多くの国々で見られるのは、社会的紐帯が弱化して暴力が一段と増大し、集団間の境界を超えて道徳的合意を達成することが、ますます出来なくなっているということである。紛争は、民族主義的、人種的、宗教的暴力によって煽られている。

「世界は、冷戦期から、いまなお定かでない新秩序へと移行しつつある。この移行期にあつて、我々は次々と生ずる出来事や技術に遅れまいと懸命に追い掛けている。イデオロギーが崩壊し、事物の諸関係が一層不分明になるにつれて、分裂崩壊の兆しは至る所に見えている。たしかに、多種多様な民族、言語、宗教、文化、経済体制相互の触れ合いは、一つの新しい世界共同体へと向かう刺激になっている。とはいふものの、貧困、不正、資源獲得不能、抑圧、差別、暴力といったものが、何十億という人々の生活を脅かし続けている。そうしたなかにあつて、永い闘争ののちに、不正義が正義へ、抑圧が自由へ、差別が公正へ、暴力が平和へと転換されてきているところでは、明らかに癒しが認められる。」

この時代にあつて我々が目の当たりにしたものに、ソ連とユーゴスラビアの解体、ルワンダ、ソマリア、ハイチなどの地における社会秩序の崩壊がある。世界はさらに湾岸戦争の恐るべき破壊、クルド人社会の迫害、クロアチアやボスニアヘルツェゴビナにおける人種的粛清の蛮行を目にしてきた。この最後のものに関連する戦争は、速やかに終結させねばならず、難民や故国を追われた人々は、その生活の建て直しを図れるように援助されなければならない。

些かの前進が見られるとはいえ、世界の人々はひどい苦しみの中にある。戦争による民間人の死傷は劇的に増大した。今日の世界には、1850万の難民と2000万の故国を追われた人々がいる。この時代にあつては、女性、子供、高齢者はとりわけ被害を被り易い存在である。スーダン、ソマリア、アフガニスタンなどの地では、飢餓や疾病に加えて暴力がはびこっている。HIV（ヒト免疫不全ウイルス、エイズウイルス）やエイズ（後天性免疫不全症候群）も、伝染病のような勢いで世界中に蔓延している。

我々は、宗教者として、宗教が時として暴力や戦争を正統化し、憎悪を掻き立てるために誤用されることを、いたく悲しむものである。我々は、破壊的な宗教的ナショナリズムや宗教的極端主義を、宗教に対する犯罪として強く糾弾する。これに対抗するのに、ただひたすら世俗主義をもって臨むのではなく、宗教本来の正しい在り方を喚起するべきである。宗教こそ、人権、自由、非暴力的政治変革への絶大な力であることを信じて疑わない。宗教が発揮する衝撃力は、平和に向けられるべきものであつて、戦争にではない。世界の傷を癒すに当たって、宗教的な取り組みと、非宗教的な取り組みとの間にますます対話が行われるように我々は進言する。

国連創設50周年を迎えるに当たって、我々は国連の達成した業績を讃え、また国連が直面する課題に注目する。1990年以来、国連は、世界の指導者を集めて子供、環境、人権、人口と開発、社会的開発、女性等々の問題を討議してきたが、これからもまた討議しようとしている。国連は、強調年を設定して、先住民、家族、寛容等の問題に注目させてきたが、さらにこれを続行しようとしている。

傷つき破れた世界の中にあつて、傷を癒し、平和と安全を確立するという仕事は、国連その他の国際

団体に対して、手に余るような新たな挑戦的課題を突き付けずにはおかない。我々はこれら諸機関の働きを支援し、国連に対する世界宗教者平和会議の献身を改めて誓うものである。

万人の生命の大切さを認める「人間的安全保障」は、人々の連帯という観念に根ざすものである。それはまた我々の相互依存性と、経済的安全保障、食糧の安全保障、健康の安全保障、環境の安全保障、個人的安全保障、政治的安全保障等の広範な必要性を認めるものである。人間的安全保障の課題に答えることこそ、平和の樹立にとって不可欠である。

共通の癒しへの呼びかけ

我々は、それぞれ異なる宗教的伝統に属するとはいえ、調和的平和の世界を生命の究極的目標、人間の精神的努力目標と見なしている。我々は、傷つき破れた世界の体験を基にして、共同体と調和に向かう我々の探究を開始する。各宗教は、それぞれの仕方、苦しみと不調和の原因を分析し、それらを克服して共同体を築く具体的な手だてを提案する。宗教共同体は、人間的諸制度の犠牲者である貧困者、被抑圧者にとりわけ心を寄せ、この人々のもとに赴き、正義と交わりを擁護する。

諸宗教は、不調和の現実を体験することにおいて一致するが、またその原因は人間的、倫理的性格を持つということ、そして人々は、究極的なものを視野に収めつつ、その個人的社会的行動によって、それらを克服しようということにおいても一致している。こうした行動は、不調和から共同体と平和へ移行するため、癒しが必要とされる様々なレベルの問題領域に焦点を合わせて行われなければならない。

癒しへの協力

これまで各宗教集団は、こうした癒しと調和の必要性を、自分の属する共同体に関連してのみ見てきたが、今やすべての宗教に属する人々は、共に生きているのである。こうした多元的な状況にあつては、宗教もまた時として分裂の原因となる。これまた癒しが必要とされるもう一つの要素になっている。けれども、あらゆる宗教者は一つになって、分裂を癒し、地域的にも、地球的にも共同体の建設に協力すべきであるという信念が、ますます高まってきている。

癒しのプロセス

分裂と破砕から共同体へと向かう運動には、癒しのプロセスが含まれている。こうした倫理的、社会的な仕事への取り組みにおいては、宗教集団はそれぞれの伝統の中に、使命感を鼓舞するものを見出すであろう。宗教集団は、経済的、社会的、政治的な事柄に利用される道具になり下がり、その霊的預言者的な活力を失ってしまうような危険を避けなければならない。互いに他の宗教集団とも話し合いながら、倫理的社会的レベルにおける共通の視野と関心を発達させていく。こうした共通の歩み寄りが、人間的、社会的、経済的権利・義務をめぐる昨今の話し合いのなかで生じてきている。けれどもこのプロセスには、苦悩、緊張、葛藤がないわけではない。次の重要な一步は、この倫理的合意を、社会的、政治的、経済的分野において、宗教が鼓舞し支持する共同行動計画へと移し換えることである。

癒しの力

個人的、社会的、地球的など、様々な次元における癒しの力は、宗教的、さらに倫理的、霊的な資源から出てくるものに他ならないが、こうした資源によって人々は目先の関心や欲求を乗り越え、究極的なものとの関係においていのちと世界を見つめ、自己から他者に目を転ずるのである。諸宗教集団は、自らの宗教がもつ優れた資源を促進し、かつそこから益を受けるにしても、これを偏狭な政治目的に悪用しないようにすべきことは勿論、他の宗教に対して寛容であり、他宗教の経験や視野をも積極的に取り込むことが出来るような幅広い見方をはっきりと打ち出すべきである。諸宗教は、限られた集団の経験を超越する全体的なるものという、まさにより広い関連において、およそ偏狭な狂信主義や排他主義という自らの病を癒される必要がある。これを癒されることによって各宗教は、社会を変革するための預言者的霊的な活力を十二分に発揮するであろう。

個人的癒し

社会との関連における各人の内面的個人的癒しは、自己の信ずる宗教によって確実に得られる。宗教は、ことに個人的、集団的生活の危機に対応するような宗教体験や儀礼の継続的執行によって、生命全体に究極的意義を賦与する。

社会の癒し

宗教者は、共同体形成のために倫理的価値を共有し、これを推進するために話し合いと共同行動に従事することができる。そうした共同行動の焦点は、人間と宇宙および人間同士の間の諸関係を踏まえながら、社会の様々な疾病を癒すことに向けられなければならない。

諸宗教間交流の癒し

そうした共同行動は、宗教的レベルにおける対話と分かち合いに道を開き、またそれによってより実りあるものとなるであろう。対話によって我々は歴史から学ぶことをえ、偏見を取り除き、相互理解を推進するのに役立てうるであろう。癒しとの関連で言えば、そこには、一方で罪と弱点の告白が、そして他方で許しの行為がなければならず、それによって和解にいたるのである。相互に聖典を分かち合うこと、他の宗教的伝統に対して敬意をもって接すること、共に瞑想に参加することなどを通して、お互いに豊かにされ、靈感を得、挑戦的課題をすら受け取るであろう。このプロセスの中で、宗教はそれぞれ、宗教本来のレベルにおける自己の同一性と真理の主張を損することなく、社会的、倫理的レベルにおいて相互に重なり合うものや、補い合うものを発見するであろう。

特別の選択

社会において共有される倫理的価値を促進するために、本気で取り組んでいることを示す一つの方法は、貧困者、底辺にある人々、無力の人々、女子、子供、被抑圧者を含め、万人に対して正義を伴った平和の擁護者となることである。このようにして、宗教の癒しの手がとりわけ必要とされているような特定分野に、注目と努力が払われる。宗教は社会の犠牲者に対する特別の配慮を慈悲、正義、公正、愛といったかたちで表明しなければならない。今日、こうした選択をするとき、抗争が伴うことになるかもしれない。しかし、抗争の解決は、非暴力的でなければならない。平和と調和を志向するものでなくてはならぬと我々は確信する。

孤立と分断：共通倫理の形成をめざして

急速に変化する現代社会において、精力的に活動する諸勢力は、人類の直面する諸問題に関して、宗教から指導と靈感を得ようとする新たな積極的態度を打ち出すにいたった。

人類は、大きな大家族である。我々は、人間的共通体験および共有する地球という住みかから生ずる基本的な霊的諸価値を有している。にもかかわらず、我々は、個人として集団として、我々の宗教的伝統が与えてくれた、生きる力の源泉としての、万物を調和させる霊的諸価値との接触を絶ってしまった。我々は、孤立した断片と化し、我々の隣人や他のグループに起こることに、余りにも無関心となってしまった。

それゆえに、物質的な貧富、老若、学歴の有無を問わず、人間家族の全員が、自分たちの社会の価値あるものを掘り起こし、これを共有するという過程に参加することを奨励する。我々が望んでやまないのは、各々の社会が、自らがもつ諸価値に目覚めてもう一度そこから靈感を引き出すこと、また他の社会の伝統的諸価値を共有することによって、豊かにされること、そしてまた、我々の基本的な倫理原則の共通の幅を広げるように努めることなどである。

我々の価値基準というものは、我々の異なる霊的伝統や様々な文化的諸関係に固く根ざすものであるとはいえ、しかし我々は、他の人間のみならず、他の生命体とも相互依存の関係にある。こうした相互依存性は、他への思いやり、命に対する尊敬、慈悲といった共通の諸価値として表現される。

こうした共通の諸価値を、我々自身の間において働かせ、地方的、国家的、国際的諸組織の課題として提案し、さらに我々の若い世代に教え込むことこそ、我々に課せられた責任でなければならない。

暴力と戦争：平和と安全の確立をめざして

暴力と戦争は、より根深い所にある社会的、政治的、経済的、宗教的病患を表すさらなる証拠である。この時点でも、大概是内戦であるが、四十以上の戦争が事実上すべての大陸で、その破壊力をほしいままにしている。そうした紛争の原因は様々であり、利己主義、権力や支配への心理的衝動、しばしば新植民地主義や市場操作の形を取る経済的、政治的搾取や支配、過去からの憎悪や見を利用し、内戦や、大量虐殺を伴う人種純化運動や、社会的心理的不安に触発された宗教的狂信主義などの形を取って現れる人種的、民族主義的国粋主義等に見出される。

これらの紛争は、二つの要素によってさらに複雑化する。その一つは、兵器の研究・開発工場からますます悪魔的な武器が産出されるようになり、世界市場でたやすく入手できる兵器の破壊力がますます高度化することによって、暴力の水準がとみに上昇したということである。第二に、国際的平和調停や平和維持の手段が、紛争解決を円滑に行うほど十分に発達してはいないということがある。

にもかかわらず、戦争や暴力は防止しうるものだというのを我々は知っている。これを防止するには、経済や政治といった現実問題の領域にとどまらず、精神的な領域での努力が必要である。精神的霊的領域においては、心から悔い改め、進んで憐れみや許しを求めまた与え、さらに、歴史を記憶することとは将来の紛争の種子を植えるためではなく、過去の悪を繰り返さないようにするためだということをよく承知した上で、和解という考え方やプロセスを推進することが大切である。

政治的領域においては、軍備競争や致命的破壊兵器の製造および貿易を止めさせ、地域的、国際的、宗教協力的な紛争防止、平和調停、平和維持、平和創出の手段を編み出すことが課題である。経済的領域において必要とされるのは、紛争を生じさせるような経済的、社会的病患を除去することである。

政治、経済、社会、精神といった全ての諸関係の中で、信用、信頼の醸成が不可欠である。そうした誠実な決意があつてこそ、世界は、50年前、国連の創設に当たって設定した目標、すなわち戦争の惨禍を無くしようという目標を達成しうるであろう。

不正と貧困：公平かつ持続可能な開発をめざして

人類家族の社会・経済的状态、それは、国内でも国家間でもますます不平等を拡大させ、生活様式に大きな格差が生じ、世界中で十億の人々の絶対的貧困を産みだしているといった状態であるが、ここにこそ最も痛切な癒しの必要性があることは明らかである。開発途上国は、圧殺されるような債務を抱え、経済的構造調整計画を否応なく押しつけられて苦しんでいるが、それらを除去するに足る手段を持ち合わせていない。軍事競争の持続的重圧のゆえに、多くの社会で軍事化が絶えず進行し、抑圧的体制が出来上がる。あらゆる国々において、男性と女性の間、機会と資源の分配に関する構造的な不公正が依然として存続している。地球の天然資源は略奪され、環境汚染が生じ、さらに生態学的荒廃が持続する。世界人口の幾何級数的成長は、ぎりぎりの人間的欲求を辛うじて満足させるという脆弱な政治体制の能力をさえ崩壊させてしまった。本来必要とされる十分な雇用が欠如し、多くの人々が社会の底辺に絶えず追いやられるという現象は、世界いたるところの社会ではっきりと現れている。

こうして蓄積された病患のゆえに、家庭や社会の不和と頽廃が起こり、宗教共同体間に政治不信が生まれ、人種グループ間に特有の紛争と暴力が生じ、民族国家間に緊張を増し加えることになった。

こうした不平等は、我々の地球共同体の構造的特徴をなす。それはまた、有効な集団的手続きの欠如、協力的ではなく競争的な国際体制が支配している無秩序的な世界社会の徴候を示している。そこには公益に対する献身在欠如しているが、それは、資源と権力を、不平等を癒すためではなく、これを存続させるためにひたすら利用するという体制に付きものの欠点である。こうした不平等を見るにつけても、国家主権の不適切さが窺われ、国家主権は、相互依存の方へと譲歩しなければならない。この相互依存なるものは、技術、環境、経済などについて見られるのみならず、また倫理的側面をもつ。そのことを

表す一つの道は、公正にして正義に合致する貿易においてであろう。

マルクス主義経済理論が、失業と貧困を一掃する正義の社会を樹立するだろうという理想主義に生きた数多くの人たちの希望は、ソ連、東欧のマルクス主義の崩壊とともに打ち砕かれてしまった。と同時に、最も豊かでかつ発達した国々の中においてさえ、資本主義の個人主義的倫理もまた、正義を実現し貧困を克服することに失敗した。世界の宗教共同体は、人類の共同体的、相互依存的側面を尊重する第三の道、つまり、相互愛と人権の尊重を基本とし、しかも我々の兄弟姉妹に対して、共に生きるという共同体的責任を取り合うような道を探究しなければならない。

貧困と不正の排除なしには宗教の究極的価値はあり得ないということを自覚し、我々宗教者は、豊かな霊的生活を産み出す人間共同体を育成するという倫理的義務の達成に努めなければならない。

抑圧と差別：権利と責任の実現をめざして

抑圧と差別の存在は、世界が傷んでいることの症候であり、また癒しを求めていることのしるしでもある。人権侵害の犠牲者たちを見れば分かるように、抑圧や差別は色々な形であらわれる。殺人、大虐殺、拷問、とりわけ婦女子が犠牲となる社会的、家庭的暴力、大量殺戮戦争、攻撃や脅迫、投獄、強制移住、アパルトヘイト、礼拝所や宗教的少数者の財産の破壊と毀損、底辺層の弾圧、宗教的自由や市民的権利の否定、就職や教育の機会の剥奪、他国への入国拒否等は、その強烈な事例である。

これらの行為は、人間の存在そのものに内在する尊厳性の許しがたい否定である。我々は、すべての人間が権利とともに責任をも有することを主張する。

信教の自由に関する権利は、他の人権の基礎をなし、かつそれらと不可分である。宗教と国家の関係においては、宗教間の多元主義的状況が、国家によって維持されるとき、少数者のみならず、全国民の福利が育成される。

宗教および宗教指導者は、しばしば人権の擁護に欠ける場合がある。宗教者にとっては、不正を前にして中立などということはいえない。ただし、不正に対する防衛は、非暴力的、非抑圧的方法において行われなければならない。宗教に拠って立つものは、平和と正義の新世界を樹立する建設的な方策を求めかつ見出さなくてはならない。

危機に瀕する地球：生態学的調和の回復をめざして

自然はうめき声を上げ、地球上の全ての生命は生き残るために助けを求めている。環境は切に癒されることを待ち望んでいる。地球の生態学的諸要素とそこに住む人間とは相互依存の関係にある。どの生物種も他の諸々の種に依存している。全てが生きていくためには精妙なバランスと調和の維持が根本になければならぬ。我々は、地球上のあらゆる生命の一体性を認識するのみならず、またこれを保持することを求められている。生命の一部が危機に陥るならば、全てが苦しみを受けるであろう。

宗教者の多くは、自分たちの宗教的伝統のなかに適切な教えがあるにもかかわらず、こうした地球の生態学的相互依存性について、悟ることが遅きに失した。余りにも我々は、近代自然科学・技術の成果、経済的発展、物質的消費にしばしば目を奪われ、いのちと自然との一体性を忘れ果ててしまった。我々は自然を、あたかもそうする権利があるかのように勝手に支配した。この傲慢さこそ、現在の生態学的危機の根本原因である。調和と共生を回復するという努力のなかで、我々の破壊的行為に対する懺悔から出発しなければならぬ。そして人間中心的な考え方から、生命中心的・地球中心的な考え方へと思考枠の転換を図らなければならない。

宗教共同体は、お互いに協力を進めながら、新たなものの考え方と新しいライフスタイルを唱導する共通の環境倫理を開発することに多く寄与するであろう。この倫理は、環境を破壊することなく、公

正にして持続的な開発を達成しうるように、態度と制度の変革を要求する。さらに、この倫理は、人間と自然の間、比較的発展した世界と発展途上にある世界との間、そして現在の世代と将来の世代との間に、正義と思いやりの関係を求めるであろう。諸宗教共同体は、自分たちの信者、とくに子供たちや青年に、この共通の環境倫理について教育することを、最優先させるべきである。

こうした倫理の設定と開発にあたっては、女性の意見が中心とならなければならない。何故なら、世界の女性は、その多くが、家族の生存のために、しばしば田畑に出て働き、燃料や水を集めたりして、大地に密着した労働と生活をしているからである。さらにまた、世話し、育て、癒すといった態度は、環境との関係においても、社会で大いに奨励されるべきである。

諸宗教共同体は、社会の最も貧しく、最も弱い人たちの側に立つことを求められている。今や我々は、こうした連帯の観念を、環境にまで推し及ぼさなくてはならない。もし大気が汚染されるならば、もしある種が絶滅の危機に瀕しているならば、そしてもし土壌が浸食され、森林が失われ、水が汚染するならば、すべての人々は、それらの自然と共に苦しむであろう。我々はとりわけ宗教者として、これらのものの声となり、助けとなって、すべての人々に、生態学的病患を癒すために働くように勧奨しなければならない。自然の諸要素は、癒しを要求する権利を持つ。そして我々は、この癒しの実現に手を貸す責任がある。

生態学的調和の回復は、自然との平和を作りだすことを意味する。従って環境に対する我々の関心は、我々の平和追求の本質の一部をなすものである。

粗末にされるいのち：子供を大切に社会をめざして

我々の伝統が教えるところでは、社会に対する究極的判断は、その社会の最も純真で最も依存的、そして最も脆弱な構成員、すなわち子供たち如何によってなされるものである。家庭のなかや戦争においても見られるような、子供たちに加えられる暴力の傷痕、つまり身体の欠損、住居の破壊、家庭の崩壊、精神的心理的な損傷などに対して責任を取るべきは、我々自身である。

また栄養不良、予防しうる病気による死亡、発育不全、教育と機会の欠如、将来に対する希望のないことなど、子供たちに対して貧困がもたらす傷痕についても我々は責任を負わなければならない。児童労働、性的搾取、兵役の強制等によって、子供が犠牲にされていることについても、我々は責任を取るべきである。環境に永久的損傷を与え、再生不可能な資源を消費することによって、子供たちの受け継ぐべき遺産を破壊していることについても、我々は責任を負うべきである。

国連の子どもの権利条約は、子供たちの救援、保護、世話を最優先させるという考えを盛り込んだ「第一の要求」を含んでおり、子供たちのために我々がいかなる努力をするべきかという方向を示す枠組みを提供している。

子供たちの諸権利は、人権の主流に位置づけられる。とはいえそれらは、個人的諸権利よりも広範にわたる。子供たちの生存する環境が、彼らの成長を支えかつ育むような環境となるように、子供たちは権利を有し、我々は義務を有する。

平和な世界を求めるには、子供たちに対して、彼らの宗教的伝統に含まれた信条や価値ばかりでなく、他宗教のそれらについても教育することが極めて大切である。家族は、子供に対する第一の教育者であるから、諸宗教共同体は、家族を支え、保持し、強化していかなければならない。

「子供がもつ究極的な意味と価値に対する我々の信仰は、我々の宗教的伝統が貴ぶいのちの神聖さに根拠をもつ。いのちが神聖であるからこそ、我々は良心の声とならなければならない。．．．我々が直面する悲惨な現実とは、現実として存在するからこそ我々に憤りを感じさせずにはおかない。その現実が黙認され、正当化されさえしてきたからこそ、我々に懺悔が要求されるのである。一切のものを問題として取り上げるからこそ、その現実是我々に対応を迫るのである。」（世界の子供のための世界宗教者会議宣言、WCRP 1990）

我々の目標は、人類の調和である。この目的を達成するために、我々は総力を結集し、協力して働かなければならない。今日および明日の子供たちは、調和的世界の松明を高く掲げるものとなるであろう。

世界の傷を癒す：平和をめざす宗教

この大会の終わりに臨んで、我々は、世界宗教者平和会議に属する全ての人々が、本大会の各部会から提出された諸提案や創造的な諸行動計画に賛同し、これに献身を誓うことを呼びかける。それゆえに我々は、我々すべてによって共有される精神的ビジョンを、あらゆる善意の人々と協力しながら、世界の病患を癒すためにより具体化していくという厳粛な責任を自ら担うものである。我々は人類の直面する重大な状況を、批判と決断をもって受け止める。我々は、苦しみを和らげ、人間一人ひとりが尊敬されるような家族、社会、国家、世界を築き上げるために、人間精神を涵養し、開発し、役立てることに専心したいと思う。この目的に向かって、我々一人ひとりが謙虚に、勇気、忍耐、知恵、憐れみを与えられるように願ってやまない。

Religions for Peace 